



現代アートにおける「食」への可能性

現代アートにおける「食」への可能性

The Possibility of "Food" in Contemporary Art

人文科学系/美術史/論文

地域キュレーションコース

東田 真歩

Maho Higashidai

◎序論

本論文では、美学史・美術史の中における「味覚・食」の立ち位置に着目し、その現状について言及する。また食を扱うアーティストの中でも「食べること」を作品としているリクリット・ティラヴァーニャを取り上げ、彼の作品に込められたメッセージを読み解いていく。比較として永田康祐が2022年に行ったパフォーマンス作品《Feasting Wild》などを挙げ、ティラヴァーニャの作品の特徴をより明確にする。

◎本論

西洋思想史では長い間、五感のうち味覚は美や芸術に関連付けることができないと考えられてきた。その主な要因は、味覚が客観性に欠けているとされてきたためである。しかし近年、美学の世界において、この考えの見直しが進んだことや、現代美術の出現によって芸術の概念が大きく変化したことで「味覚・食」の立ち位置も変化し、これらを作品の中に取り込むアーティストも出てきた。

ティラヴァーニャは1990年に《無題 1990 (パッタイ)》を発表し、一躍有名となった。ティラヴァーニャの作品の特徴は、「ありのままの日常」を美術空間に持ち込み、鑑賞者たちの自由な交流と個人の想いを重視する点にある。その点において、食材そのもののバックグラウンドに注目し、作品一皿一皿にキャプションを付ける永田康祐の作品とは大きく異なっている。

◎結論

味覚の客観性の不在が指摘され、芸術から排他されてきた時代を経て、美学、芸術の世界は大きく変容してきた。芸術作品が多様化している今日において、ティラヴァーニャは「食」を作品とすることで、人々の目を「ありのままの日常」に向けている。永田やダニエル・スポエリなど、食を扱う他のアーティストたちと比較すると、この「ありのままの日常」を作品に取り込むというティラヴァーニャの特徴が顕著に現れてくる。